

# 東京のヒバリの急激な減少とその原因

植田睦之<sup>1</sup>・松野葉月<sup>2</sup>・黒沢令子<sup>3</sup>

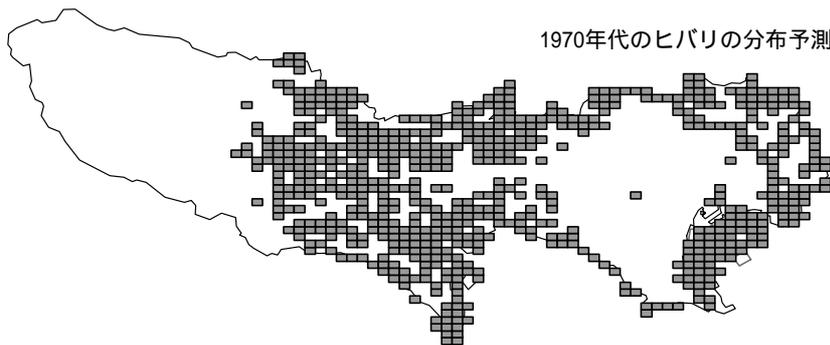
1. バードリサーチ・2. 日本野鳥の会・3. 北海道大学地環研生物多様性 G.

ヒバリは、畑などの草原状の環境でみられる身近な鳥だが、環境省の全国分布調査では、近年、分布が全国的に縮小していることが指摘されている。ヨーロッパでも、ヒバリは減少しており、農耕形態の変化がその主要な原因とされているが、日本でなぜヒバリが減少したのかわかっていない。日本では、ヒバリに限らず草地に生息する鳥の多くが減少しているので、その原因を明らかにすることが重要である。そこで東京都が1970年代と1990年代に行なった鳥類繁殖分布調査と植生調査の結果をもちいて、分布の変化とその要因について検討した。

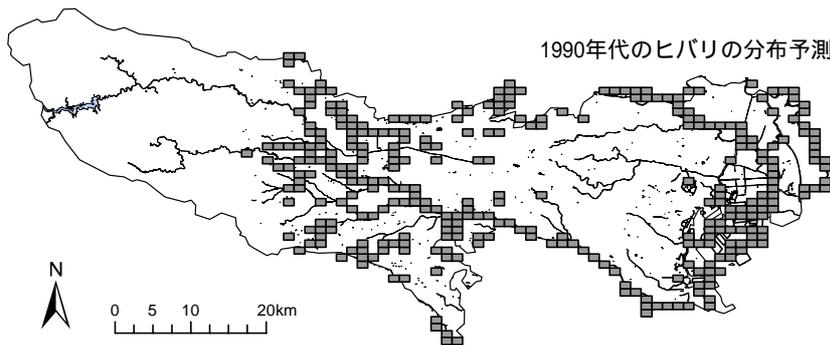
調査は3次メッシュ(約1km四方)単位に行なわれたが、ヒバリの記録されたメッシュ数は1970年代の101メッシュから1990年代の28メッシュへと急激に分布を縮小していた。

ヒバリが記録された標高300m未満の地域について、生息の有無を目的変数、植生面積を説明変数とした判別分析を行なうと、1970年代、1990年代ともに説明変数として草地と畑地および水辺環境が選択された。1970年代は畑地がもっとも重要な説明変数だったが、1990年代は最も影響力の小さい変数だった。耕作物の変化あるいは畑地の分断化により、畑地が好適な繁殖地でなくなりつつあることが示唆された。判別式を東京全域にあてはめると、生息確率90%以上のメッシュは、1970年代は、657メッシュだったが、1990年代は313

メッシュと、約半数程度にまで減少しており、生息地の減少がヒバリの減少に大きな影響を与えていることが示唆された。



1970年代のヒバリの分布予測



1990年代のヒバリの分布予測

判別式で予測されたヒバリが生息可能と考えられるメッシュの年代間比較。1970年代は畑の多い台地にも広く予測分布地が広がっていたのが、1990年代は河川沿いと埋立地に限定されている。